

シヤ語も、中学校で英語のできない生徒以上に、私の不勉強のためにできませんのに、このようなちょっとした英語の教え方一つにも、先生の御指導がほんの微かではありますがあらわれるものと驚き感謝の念を深めました。

しかし、何と申しまして最大の失敗は、中学生の方です。教材がやさしいのでつい安心してしまったのです。

中1の場合は、教えるべきこととして3つのことがありましたので、私は単純に3分の1の比重で教えればいいと思いそのように指導案を立てておりました。なるほど中学校のリーダーがサラサラ読める人には、同じようにやさしい3つの事項でございまして、英語を習いはじめてまだ7ヶ月の中学生には、やはりすぐにわかるものと、むづかしいものがあるのです。具体的に申せば、

1. I know him, her etc. といった目的格の問題 2. These boys are my friends の this boy の複数形 these boys の表現 3. where do you live? といった疑問文が、私の教えます課の中に、新しいことがらとしてありました。ここで一番生徒にとってむづかしいのは、目的格であることに、教壇に立ってはじめて気づき、指導案通りではない目的格の Pattern Practice をと思い焦るのですが、なかなかいい具合にでてこず、We know us. といった英語を生徒に言わせてしまい、生徒の方から「先生おかしいですよ。」と言われ、全くどきまぎしてしまいました。このような失敗は教え上げればきりがないのでこの辺でやめます。

最後にこれから教生をなさる方のために、申し上げたいことは、指導案はできるだけ綿密に立て、教壇に立って多少修正するのはかまいませんが、なるべく指導案に沿うようにした方がいいということです。しかしこのように文の中で申しまして教育実習の本当の良さはわかりません。将来教職につくつかないは別にしても、教壇に立つ経験をするということは本当に有意義なことだと思います。

## 私 と オ イ デ ィ プ ス 王

田 村 正 夫

古代ギリシヤ悲劇であるポクレスの「オイディプス王」は、アリストテレスが批評するように、「逆転」（劇中の状況が正反対の方向に転換すること）と「真相の発見」（無知から知への転換）という作劇手法によって、出来事の構成の緊密化と強度の増大という点ですぐれた効果をあげてい

ることはいふまでもない。ここでは、そのすぐれた作劇手法を問題とするのではなく、古代ギリシア人と、神・国家・家族血縁関係について、異なる考え方を持つ私にとって、「オイディプス王」とは何か、を考えてみたい。

「オイディプス王」が私に迫ってくる時、そこには、古代ギリシアと現代という時間的間隙も、西洋と東洋という思想的背景の違いもない。私のなかに生きる「オイディプス王」が目覚め、そして飛翔するのである。「だがやがて、あなたがたの前にもそのお姿を現わしましょう。見よ、扉の門がはずされる。いまこそ、あなたがたは、目のあたりになさるでありますよ。」

私には、未知の世界はわからないはずだ。しかし、私は、自分の存在を、ただ「知っている世界」だけでなく、「知らない世界」をも含んで把握しようとする。従って、私には、未知の世界を知ろうとする欲求・未知の世界に対する憧憬・希望、そして恐れがある。それは、いまの私にはわかり得ないもの、それだけ、私の本質的な欲求として、私の本質の投影として、「神」の存在と次元を同じくする。つまり、私は、私の「知っている世界」と、「知らない世界」において、自分の存在をあたかもつかんでいるかのような幻想のなかで生きているのである。未知・未来という時間的次元は、既知の世界を含んで、私の運命として、私の存在そのものを包んでいる。オイディプス王は、私の運命に、その鋭い針先を向けるのである。

「ああ、知っているということは、なんという恐ろしいことであろうか、知っていても何の益もないときには」（第一エピソード）と予言者テイレンシアスが語る言葉は、少しづつ知ることによって、自己の存在を包む運命の驚くべき奇怪さ、不思議さが自らの身にかかってくることを意味している。「ああ、なんでしょう、もしやわしはさいぜん、それを知らずにみずからを、おそろしい呪いの中に投げこんだのではあるまいか」（第二エピソード）とオイディプスは未知の世界を知らずにいた自分がそれを知ったことによって、自分の存在を揺り動かされている。知るということは、人間の存在を支えているものなのである。予言者テイレンシアスは、オイディプスの知らない世界を、つまり、彼の存在すべてを包む運命を知っている者であり、オイディプスは、自分の知らない世界を知っているかのような幻想のなかで生きているにすぎない人間なのである。

知らずにいるということは、どんなにすばらしいことであり、知るということは、それが自分の存在を左右するものであるだけに、どんなに恐ろしいものなのかをオイディプスは悟っていく。

知ることは、同時に、もはや消すことのできない、内なる罪の意識を自覚させる。知らなければ内なる罪はない。しかし、内なる罪は「あなたと一緒に住んでいる、自分のもの」（第一エピソード、テイレンシアス）であり、「おのづからやって」（同上）来るものなのである。時間の流れは、知ることを誘い、「この呪いをわが身にかけたのは、ほかならぬこのわし自身なのだ！」

(第二エピソード、オイディプス)と内なる罪の自覚を呼び起こす。決して消すことのできない内なる罪を認識したオイディプスは、自ら黄金の留金で、「自分の両の目ふかく、真向から突き刺」(エクソドス・報せの者)し、「みじめな自分を外界から遮断し、何もみえず、何も聞かぬように閉じこめて」(エクソドス、オイディプス)してしまうことによって、「忌わしい思い出をさそう数々のものの、屈かぬところに心をすまわせ」(同上)ようとする。それは、内なる罪に対して、自ら罰を下し、そして生きぬかなければならないオイディプスにとって、唯一の残された道であると思われる。

知る こと によって、自らの罪を自覚し、その罪に常に負目をおいながら、追われ生かなければならないのは、オイディプスだけでなく、私たちひとりひとりの運命ではないでしょうか。よりよく生きようとするのは、私の罪の自覚であり、私の過去ひとつひとつが、私のなかで往来しています。

(1970.11.3)

## 北 国 の 島 の 印 象

池 田 康 雄

1970年8月19日未明函館上陸以来約半月間、筆者は北海道の方々をHoboの如くさすだったが、観光地と名の付く所はいずこも観光客という名の雑踏が殺到しており、ユース・ホテルや旅館はパチンコ屋の張り紙を借用するほどの盛況であって、筆者の目的とする自然への逃避は至る所で迫害されたのである。しかし、北国の大自然はそんな失意の遊子を雄大に歓迎し、やさしく慰撫してくれた。ここでは最も印象深かった焼尻島の思い出をたどろうと思う。

焼尻島は、札幌から急行列車で4時間の羽幌の港から船で1時間余りの日本海上の、オロロン島で有名な天売島と夫婦の如く相並んで浮かぶ、面積5kmの緑の島である。広辞苑にも載っていないこの島を訪れたのは、8月29日午後1時前であった。函館から、札幌ー利尻・礼文両島ー網走ー知床ー摩周湖ー阿寒ー釧路ー然別湖ー襟裳岬を廻って札幌の藪下先輩を再訪し、寝所を半分占領させて頂いて不眠の先輩を横目に熟睡し、翌朝、頭や爪等口に入る物総ての位置を冷蔵庫(先輩の所有物)を空にすべくリュック(筆者の所有物)に大移動させてから、意気揚々と同所を引揚げ、午前中も時間、汽車、バス、船を乗り継いだ後のことである。船客は天売島へ行く人が大部分で、降りる人は少なかった。リュックを港の売店のベンチに預かってもらいと、パンフレットを唯一の命